

### (23) プラトンのエロス哲学（「或る反時代的人間の偵察行」の23）

プラトンはさらに先に行っている。彼は、キリスト者がもてないギリシャ人ならではの「無邪気さ(eine Unschuld)」をもっている。すなわち、彼はアテナイにかくも「美しい青年たち」がいなかったなら、彼の哲学はありえなかったであろうと言っている。「美しい青年たち」の「眺め」こそ、哲学者の魂を「エロスの興奮状態」に陥れ、その魂に休息を与えない当のものである。隠遁者の「概念の蜘蛛の巣織り」やスピノザ流の「神の知的愛」ほど「ギリシャ的」でないものはない。プラトン流の哲学はむしろ「エロスの競技」として、「古代の競技的体育の内面化」として定義づけるべきであろう。このプラトンの「哲学的エロス術」から「ギリシャ的競技の新しい芸術形式」、すなわち「弁証法」が生まれたのである。

### (24) 生への大きな刺激剤としての芸術（「或る反時代的人間の偵察行」の24）

「芸術のための芸術(l'art pour l'art)」とは「芸術における目的に対する闘い」、「芸術における道徳化に対する闘い」、「芸術の道徳のもとへの従属に対する闘い」であり、「道徳なんか悪魔にくれてやれ」ということである。しかし、この敵意は「偏見の優勢」を露呈している。「道徳的説教や人間改善の目的」を芸術から締め出したとしても、「芸術がそもそも無目的、無目標、無意味、要するに芸術のための芸術—自分の尾に噛みつく蛇—である」ということにはならない。「道徳的目的よりむしろ目的がない方がよい」と語るのは「単なる熱情」に過ぎない。

「芸術とは生への大きな刺激剤(das grosse Stimulans zum Leben)」である」。そこからすると「無目的、無目標、芸術のための芸術」というものは理解できない。また、「芸術」は「生の多くの醜いもの、苛酷なもの、疑わしいもの」を表現する場合がある。そのことによって「芸術」は「生から苦悩を取り除く」ように思われる。実際、ショーペンハウアーは「意志から離れること」を教え、それが「芸術の総体的意図」であり、「諦念へと気分づけること」を「悲劇の大きな効能」とであると尊重している。しかし、これは「厭世主義者の光学」であり、「悪しき眼差し」である。

そもそも「悲劇的芸術家」が伝えることは「怖ろしいものや疑わしいものを前に恐れない状態」である。この「状態」を知る者は、それを最高の敬意をもって尊重する。「強力な敵、崇高な災難、戦慄を呼び起こす問題」を前にしての「勇気と自由」、こういう「勝ち誇れる状態」こそ、「悲劇的芸術家」が選び出し、賞讃するものである。「英雄的人間」は「悲劇」でもって自分の生存を讃えるのである。

### (25) 高貴な客を迎え入れる心（「或る反時代的人間の偵察行」の25）

人を我慢強く受け入れ、自分の心の扉を開けておくことは寛大ではある。しかし、「高貴な客」を迎え入れる心は、カーテンを下ろした窓や締め切った錠戸で、それと見分けられる。その心は「最も上等の部屋」を空けて待っている。それは我慢強くしなくてもよい客が訪れることを待っているからである。

### (26) 体験と言葉（「或る反時代的人間の偵察行」の26）

われわれの「本来の体験」は全く「饒舌的」ではない。それは「伝える」ことはできない。

それは「言葉(das Wort)」を欠き、「言葉」領域を超えている。すべて「語り(Reden)」のなかにはほんの少しの「軽蔑」がある。「言葉(Die Sprache)」は「並みのもの」、「平均的なもの」、「伝達できるもの」のために考え出されている。「言葉」によってすでに「語る者」は「通俗化」されている。